

丁寧な進路・生活指導が留学生を増やす

——盛況裏に14回目を迎えたJaLSA進学フェアの開催——

◆「アベノミクス効果」で日本経済も上向き、例年以上に活気に満ちた会場

日本語学校唯一の業界団体である全国日本語学校連合会（JaLSA）が主催する日本語学校と大学・専門学校をつなぐ進学フェアが今年も去る6月24日、東京・御茶ノ水の中央大学駿河台記念館で開かれた。毎年6月と10月の年2回で行われる進学フェアへの参加校は、日本語学校側が35校に、語学留学生の受け入れ先の大学・専門学校側が足利工業大学と桜美林大学の2校が増えて35校といずれも会場を埋め尽くす参加となった。

東京都心での開催という地理的条件上、これまで参加校はどうしても関東中心になり地域的偏りが出ていたが、今年は、日本語学校側は、沖縄から北海道まで幅広い参加があり、また大学・専門学校側も参加大学が増えるなど、会場は机を挟んで少しでも優秀な留学生の確保を図りたい大学・専門学校側と、留学生の適正にあった大学・専門学校を見つけない日本語学校側との真剣なやりとりが交わされ、日本経済が上向きだった「アベノミクス効果」も手伝ってか、会場は、例年以上に活気に満ちた展開となった。

◆JaLSAへの参加日本語学校は100校に増加し、賛助会員は50機関に大幅増

フェアの冒頭、JaLSAの荒木幹光理事長が開会の挨拶に立ち、「JaLSAが今年で創立10周年を迎え、会に参加する日本語学校が100校になり、賛助会員も50機関に達しました」と、JaLSAが発展を遂げている現状を紹介した。

日本語学校を目指す語学留学生の実情についても「(領土問題など様々な問題が起きて)中国の留学生が減っているが、ベトナムの留学生が日本で研究を重ねたいと日本の大学を目指しており、一挙に学生数が増えている。ベトナムは『今日のベトナムがあるのは日本のお蔭』と大変親日的です。これからはミャンマー(旧ビルマ)などの学生も増えますので、生活指導と文化の違いについても、留学生をご指導いただきたい」と日本語学校に指導力の強化を訴えた。

荒木理事長はさらに「日本語教育を一生懸命にやって、しっかりした日本語の技術(スキル)、マナーをつけて社会に送り込んで欲しい」とも呼びかけた。

同時に、日本語学校が置かれた現状について「これからはアジアの学生が日本を目指してもっとやってくる。彼らは日本の戦力になる人材です。留学生指導の環境を整えるために、文科、法務、外務の3省を回って、(会社法人の)日本語学校が抱えている消費税問題や留学生の学割定期問題の善処を要望するなど関係省庁への働きかけを活発にしてゆきたい」と、監督官庁への働きかけをさらに活発化する意向も表明した。

◆留学生の生活指導を徹底し、ベトナム留学生採用では認証制度の活用を訴う

その上で、荒木理事長は JaLSA がベトナム教育訓練省（日本の文科省に当たる）に働きかけて開拓したベトナム留学生の教育認証制度について触れ「今、ベトナム留学生の卒業証明書の偽造が出回っている。こうした不正を防ぐためには是非、ベトナム教育訓練省の認証制度を利用して問題のある留学生が入らないよう、積極的にご利用いただきたい。JaLSA は認証制度では一切、仲介料を取っておりません。大いにご利用下さい」と不正防止策を訴え、挨拶を締めくくった。

会場でこの話を聞いた JaLSA 理事で沖縄の日本文化経済学院の仲田俊一理事長は「今のベトナム留学生は15年ほど前の中国（福建省）からきた留学生と同じです。問題学生が少なくない。当時の福建省の学生は躰けや礼儀も問題が多かった。文化の違いといえばそれまでだが、中国は自己主張で国を発展させてきたが故に、文句が少ない日本人を馬鹿にした態度が多かった。しかし、ベトナムは中国と違うところもある。『日本は良い国だ。違反したら大変だ』と教えられているとも聞いている。日本語学校の興隆のためには、やはり留学生に対する日頃のきちんとした生活指導が大切です」と感想を語る。

ベトナム留学生が多い千葉県松戸市の KEN 日本語学院の栗山久校長は「留学生の中には、アルバイト先で万引きをしても謝らない学生もいる。うちでは悪い事は悪いときちんと謝らせる躰けをしています。人としてやって良い事といけない事のけじめをつけることが国籍を問わず学生には大事です」という。

◆東京入管の在留資格認定証明書交付申請は過去3年で最多、ベトナム6倍に

ところで、東京出入国管理局の調べによると、日本語教育機関（日本語学校）における平成25年4月生受入れのための「在留資格認定証明書交付申請状況」は、申請総数1万771人と前年同期より3925人増え、この3年間で最多申請数となったことがわかった。まだ、全国規模の統計ではないが、日本語学校が頑張っ、東日本大震災・福島第1原発事故などで減った中国・韓国の留学生減を補って余りある結果をもたらしたようだ。

国籍別では、それでも中国が最も多かったが、親日的なベトナムが前年同期

に比べて6倍、ネパールが3.3倍と飛躍的増加をみせており（以上は財団法人入管協会発行の月刊誌『国際人流』2013年7月号より）、JaLSAが進学フェアで見せたベトナム留学生の生活指導に注意を喚起し、今から力点を置いている理由がよくわかる。

同誌の編集後記では「これも『留学』の在留資格の不法残留者が前年比10.7%減の2847人、同じく刑法犯検挙外国人が198人減の853人となるなど各教育機関における在籍管理の向上によるものと思います」と分析しているが、ここで気を緩めては日本語学校の向上に傷をつける結果となりかねず、一層の学生指導の向上が求められていることは確かなようだ。

◆日本語学校、大学・専門学校ともフェア評価は高いが、日本学生に奮起促す

要のJaLSA進学フェアだが、会を重ねて第14回を迎えた。各国留学生に日本語を教えて大学・専門学校・企業へと送り出す日本語学校側のアティスインターナショナルアカデミーの佐藤厚潮校長は、同進学フェアについて「地方（宇都宮市）にいと大学・専門学校との交流はなかなかできないが、東京では機会が多い。このような進学フェアは直接、交流ができるので我々にとって大変ありがたい」と感想を語る。

一方、日本語を習得した留学生を受け入れる側の専門学校デジタルアーツ東京の担当者は「留学生の紹介を日本語学校から受けるのでも、その日本語学校の担当者と顔見知りになっているのと、いないのでは大変違います。やはりJaLSAの進学フェアに来て日本語学校の学校担当者と知り合いになっていると、良い学生を確保しやすい気がします」と対面交流の効用を評価する。

国際コミュニケーション専攻コースがメインで、留学生は英語とITスキルを学ぶ神田外語大学では、日本で働きたいという学生は、これまでは中韓両国の学生が大半で、中国留学生が8割、韓国留学生が1割を占めている。同校の入学担当者は「進学フェアは、日本語学校の先生から直接、話を伺える貴重な機会。両国の学生は『日本で働きたい』という優秀な学生が多い。彼らと日本の学生を比較すると、日本の学生は打たれ弱い。打たれるところに身を置かない。出る杭は打たれるというが、出る杭にならないようにしている。総じて親が甘いのが原因ですかね」と語る。中韓両国の留学生の勉強ぶりと比較すると「日本人学生の態度の甘さを感じる」という。どうやら日本人学生は親から鍛え直す必要性がありそうだ。

◆海外のあやしい日本食失くしたい。理系大学の良さを知ってもらいたい機会

専門学校の誠心学園は3回目の参加だ。東京・蒲田に東京誠心調理師専門学校を、横浜に国際フード製菓専門学校を運営している。

同校担当者は「JaLSA 進学フェアは、日本語学校の先生と直接話を聞ける良い機会です。うちは中国、台湾の学生が多いが、ベトナムから 8 人きている。ベトナムでは日本語のハードルが高いようだ。日本語学校で日本語を鍛えてもらうとありがたい。お菓子は洋菓子を教えているが、菓子製造水準は中国、韓国でもまだまだ低い。こちらで学びまた現地に戻ってお菓子屋さんや日本食を出したいという学生が多い。しかし、あやしい日本食が海外で広まっているという声も聴くので、きちんとした日本食を教えることも必要だと思います」と語る。

栃木県の足利工業大学は初参加。県内のお寺、十七寺が集まってできた「仏教和合会」が設立した足利実践女子高が前身の工業大学だ。学生 1300 人中、130 人が留学生だ。担当者は「日本語学校の先生と話しを聞く機会はほとんどない。関東だけではなく、主要都市で進学フェアを開催してほしい。日本語学校の先生方は理系に弱いので、こうして進学フェアで理系大学の良さを知っていただけるのはありがたいことです。大学がどこまで対応できるか、どこまで道を開けるか、留学生にルールを見せてあげないとわからないので、我々は家庭訪問、留学生の生活支援など私立大学ならではのサービスを誠実に提供しています」と、地方大学の良さをアピールしていた。

◆留学生の欧米志向熱は冷め、充実した教育こそが留学生を自然と日本に戻す

初参加の桜美林大学の担当者は「JaLSA のお誘いを受けて参加したが、とてもよかった。10 校にのぼる日本語学校の先生方にお会いできた。大部分は事前にアポイントをとっていたが、3 校はこの場でお会いできた。(フェアはアポイント方式だが、予約なしでも可) 日本語学校の皆さまには、こちらが聞きたい肝腎なポイントを説明いただき収穫があった」と進学フェアでのコミュニケーションに高い評価を与えた。

同担当者は、東日本大震災と福島原発事故の影響については「完璧では無いが、たぶん来年ぐらいはもう少し良くなると思う。私は留学生の欧米志向の熱は冷めたと思っている。日本が教育をしっかりやっていけば留学生は自然と日本に戻ってくると思います」と、留学生の動向について楽観的見通しを語った。

千葉県安孫子市にある中央学院大学は学生 3000 人中、300 人が留学生。うち 8 割が中国人学生で、国際ビジネスコース、ビジネスキャリアコースがそれぞれ商学部、法学部にあり、多くの中国人がそうしたコースを学んでいる。同校の入試担当者は「学校の位置が、都心から相当距離があるので、進学フェアは大学を知っていただく良い機会として大変ありがたい」と語る。留学生は東日本大震災などで 20 人が出国したが、18 人が戻ってきた。日本とのつながりを大事にし、日本で就職したいという学生が毎年増えている」と語り、日

本に対するアジア諸国の評価が依然として高いことを伺わせた。

◆緻密な留学生アンケート調査で指導要領作成し、尊敬される語学留学生育成

日本語学校の長老ともいえる東京リバーサイド学園の浜口猛比古校長は今回の進学フェアについて、「日本語教育振興協会が中国で6～7月頃、中国で年1回、ベトナムで春秋各1回ずつ留学生の獲得を目指して進学フェアを実施しているが、大学と日本語学校と一緒にブースを出しているため留学生の獲得が難しい。体力の無い日本語学校は、図体の大きい大学とは同じ土俵では戦えません。大学側は、留学生の獲得の為に留学生の紹介機関に10万円、20万円と出しているようだが、私どものような学校の規模では10万円でも出すのは難しく、みな留学生は大学に取られてしまいます。その点、JaLSAの進学フェアは、日本語学校と大学・専門学校が向き合う関係なので大変助かります」と語る。

前述の仲田氏は、最後に次のような感想を述べた。「国境なき医師団に参加している看護師さんには立派な人が多いが、日本では日本の国家試験に合格して資格をとらないと働けない。しかし、看護師さん、介護士さんにとって大事なのは日本語での会話力です。日本語学校で十分会話力を身につければ日本で働けるようにさせてあげたい。そのためには日本語学校の質を上げ、日本の基準が世界に誇れる基準になるよう努力しないとイケない」と。

そこで仲田氏は、JaLSAも留学生に大々的にアンケートをとり「例えば、何の目的で日本に来たのか、どのような勉強をしたいのか、消費者（留学生の採用先）がどのような留学生を望んでいるのか、JaLSAが留学生の進路指導の一環として大規模なアンケート調査を留学生の他、企業・大学・短大・専門学校を対象に試みたらどうかと思います。それを元に、JaLSAが留学生をどのように育てていったら良いのか、質の高い留学生を育てるための一貫した指導要領を作成したらどうかと思います」と意見を寄せた。そこまで日本語学校の水準を上げるには幾多の苦労があるだろうが、価値ある試みである。

◆創意工夫で日本語学校のレベルアップを図り留学生に日本の美質を伝えよう

日本語を見事に修得し、学生としても立派な語学留学生は、どこに就職・進学しようと、採用先から必ず歓迎されるだろう。3万人から4万人に及ぶ日本語学留学生は、人材から見て多種多才かつ玉石混淆だが、JaLSAは、日本語学留学生としてのみならず、1留学生としてどこに出しても恥ずかしくない、母国に帰っても尊敬される日本語留学生を育てるために、日本語教育のみならず、人間を鍛える教育を施して、日本語学校の成果、ひいては日本の魅力を高めるように努力することが求められる段階に来ているのではないだろうか。

日本語学校の教育プログラムは初めから「日本語教育」に特定されているが、

それでも工夫の余地はたくさんあるだろう。日本が戦後の焦土の中から70年近くを経て、経済大国として、かつ世界から尊敬される国家にまで成長したのは「わが国先人の絶えざる工夫、勤勉、努力、正直、責任感がもたらした功績のお蔭」だ。こうした日本人の美質を、授業の合間、合間に留学生に語り聞かせることは、決して無駄ではない。JaLSA参加の日本語学校にさらなる創意・工夫を求めたい。